NO BOOK, NO LIFE！
仙台オヤジ編集者3人衆
おすすめ本ベストテン
2023 第14回

東北大学出版会　　プレスアート　　荒蝦夷
小林直之・川元茂・土方正志

【トークイベント】
**タピオ館立オープン大学「在仙編集者3人がしゃべりまくる
年末・年始におすすめの本2023年版」**
日時：2023年12月22日（金）19:00～20:00
場所：泉パークタウン　タピオ南館1階（予約不要）
TEL.022-375-8808◎http://fm797.co.jp/tapidai/

〈BOOK SPACE あらえみし〉新春恒例おすすめ本・2023年版
日時：2024年1月6日（土）14:00～15:00
場所：フォーラス3階　BOOK SPACE あらえみし（要予約）
TEL.022-298-8455

入場無料
出演／小林直之・川元茂・土方正志

2023 年 冬

小林直之（編集者／東北大学出版会）

1972 年仙台市生まれ。明治大学文学部卒業。東北大学出版会事務局長。一般社団法人大学出版部協会理事。河北 tbc カルチャーセンター講師。時事通信等に文芸・ノンフィクション作品の書評を執筆。

【総評】今年の芸術鑑賞で感激したのは、ある楽団が演奏した「ポロネーズとアリア～吹奏楽のために～」。勇ましさを伸びやかさが追い、再び勇壮さをまとってエンディングへ向かう展開、管楽器と打楽器が一体になった音の迫力と美しさに魅了されました。来年も素晴らしい演奏に期待します。

①『それは誠』／乗代雄介／文藝春秋／ 1, 870 円
心の底から「大好き」と言える本に出会いました。主人公は孤独な男子高校生。修学旅行から帰った翌日、学校をずる休みして旅の思い出を書き始めます。ロードノベル？　独白形式の回想もの？　いやいや、本作の構成にはどんな型にもはまらない魅力があります。そしておそらく、ハッと気づくような仕掛けも施されてい（るように私は思い）ます。主要人物を多く登場させ、彼らの会話だけで背景を説明し物語を展開させていく手法が見事に成功していて、読み手は常に彼らと同じ場所にいる感覚でストーリーに参加できます。読んだ後、しばらくは黙っていたくなるのは、主人公の気持ちにもう少し寄り添っていたいからと、これから読む人に本作の持つ瑞々しさの一滴ですら漏らしたくないから。心の底からお勧めします。

②『杉浦康平と写植の時代　光学技術と日本語のデザイン』／阿部卓也／慶應義塾大学出版会／ 4, 400 円
いやはや、すごい本です。私が雑誌編集者として働き始めた約 30 年前、版下づくりの基本は写植（写真植字）でした。写植屋さんは印刷会社さんよりも身近で頼りになる存在で、雑誌づくりの厳しさも楽しさも写植屋さんに教わったような気がします。しかし、写植の成り立ちも仕組みもほとんど知る機会のないままに存在が遠くなり（ほんとうに惜しいことをしました）、今では当時の話を振り返ることすら困難になりました。そんな中で読んだ本書は、写植時代を知る出版・編集人にとって卒業アルバムやタイムカプセルのような存在と言えます。人物伝や産業史としての役割を担う手堅い構成を守りつつ、あくまで「時代」を浮き彫りにしようとするノンフィクション的な手法が、かえって読み手にノスタルジーを感じさせます。一冊の本にこれでもかと盛り込まれた過剰な仕掛けも、過剰ゆえの愛しさと切なさが醸し出されます。

③『事務に踊る人々』／阿部公彦／講談社／ 2, 090 円
縦横無尽に交錯する知的な刺激を「事務的に」考えられる一冊です。「現代の社会で不当に軽視され、嫌がられ、ときには蔑まれさえしてしまう事務の営みについて、再考したいのである。可能であればその汚名を晴らしたい。汚名どころか、事務には美名がふさわしいのではないか。事務は魅惑の世界への入口ではないのか」……。ここまで盛り立ててもらえると、事務仕事を生業としている者としては涙モノの感動が胸に押し寄せてきます。事務仕事をしている方であれば、事務仕事がいかにクリエイティヴでエキサイティングでドラマティックであるかをご存知のはず。文学者の著者がつづる本書は事務が持つ多様な側面を文学作品を例に考えるもので、そのベクトルの方向の意外さとたどり着く結論の説得力に驚きます。事務が手がけ、解決し、後片付けし、次へと継承する仕事が、いかに多く重いか。様々な事務職への敬意はもちろん、事務職であることの誇りをいっそう高めてくれる一冊です。

④『奇跡のフォント　教科書が読めない子どもを知って　UD デジタル教科書体　開発物語』／高田裕美／時事通信社／ 1, 980 円
ディスレクシア（「学習障害のひとつのタイプとされ、全体的な発達には遅れはないのに文字の読み書きに限定した困難があり、そのことによって学業不振が現れたり、二次的な学校不適応などが生じる疾患」：国立成育医療研究センターのサイトより）のことを知ったのは、ジュリア ジャーマン著『９番教室のなぞ―幽霊からのメッセージ』（ふなとよし子訳／松柏社／ 2005 年）を読んだのがきっかけだと思います。その困難さは私の想像がとても及ぶものではないとしても、本や文章にかかわる者として常に意識しておくべきことと考えています。UD フォントは読字障害等のある方にも読み易いフォントとされ、とくにその教科書体は学習現場において待望されていたものでした。本書はその書体の開発に携わった方の著作で、山あり谷ありのプロセスが克明に記されています。同時に、「教育」や「学習」、さらには「配慮」の本質を考える論点も多く、大切な気づきを得る読書となりました。

⑤『タイポグラフィ・ブギー・バック　ぼくらの書体クロニクル』／正木香子／平凡社／ 2, 530 円
上の②と④ともかかわるのですが、書体好きのマニア心をくすぐられました。「書体が名作を生む」というロジックにおおいに同意しつつ、それはなぜなのか、著者の主張に頷きながら自分なりに考えるというこの上ない読書の興奮を味わった一冊です。

⑥『索引　～の歴史　書物史を変えた大発明』　／デニス・ダンカン（小野木明恵訳）／光文社／ 3, 520 円
索引づくりは本づくりの中でもなかなか厄介なものの一つで、一筋縄ではいきません。小説やエッセイに索引が付くことは稀でしょうが、学術書の世界では非常に重要で、索引のあるなしでその本の評価が変わることすらあると言われます。そんな「索引」の歴史をたどった本書、実に興味深く読みました。索引は読み手の便に資することは間違いありませんが、索引を用いることはその本の体系的な知を有意に細分化することでもあり、それは果たして「読書」であるのか……。現代の「検索生活」とのつながりも見えてくるこのテーマは、多くの現代人にヒットするものかもしれません。

⑦『未来から来た男　ジョン・フォン・ノイマン』／アナニヨ・バッタチャリヤ（松井信彦訳）／みすず書房／ 3, 960 円
春先頃、藤永茂著『ロバート・オッペンハイマー　愚者としての科学者』（ちくま学芸文庫／ 2001 年）を夢中になって読みました。科学者の評伝は実に面白く、読んでいて興奮するものですが、本書もワクワクさせてくれること間違いありません。オッペンハイマーがリーダーを務めたあのマンハッタン計画で「爆縮」を担当したのがノイマン。複雑な気持ちにはなりますが、この点だけでノイマンを捉えるのは惜しい。タイトルのとおり未来から来たとしか思えないようなその知性は驚異的で、読んでいて科学の歴史の時系列がおかしくなってくるような気になるのは私だけではないはずです。「悪魔の頭脳」を持つ異才の天才の生涯、知ってみたいと思いませんか？

⑧『測る世界史　「世界の基準」となった７つの単位の物語』／ピエロ・マルティン（川島蓮訳）／朝日新聞出版／ 2, 420 円
「なるほど」がいくつもいくつも連なっていくような読書を楽しめる一冊です。様々なものに様々な単位が当たり前のようにありますが、もしそれらの単位が無かったとしたら、日常生活もコミュニケーションもたちまち立ち行かなくなることでしょう。それだけ重要な「測る」という行為。本書は、革命によって生まれた「メートル（長さ）」、太陽と音楽により育まれた「秒（時間）」、数々の悲劇とともにある「キログラム（重さ）」など、身近な単位の成り立ちを世界史で語り、「なるほど」と思わせてくれます。この腑に落ちるところがなんとも快感です。科学と人文知が生み出した最高の成果と言える単位。興味が広がり深まること間違いありません。

⑨『言語の本質　ことばはどう生まれ、進化したか』／今井むつみ、秋田喜美／中公新書／ 1, 056 円
最高に面白い本です。「オノマトペについて徒然に考えていたら、さまざまな問いが生まれた。オノマトペはなぜ音から意味がわかるのか、オノマトペは世界をどのように写し取っているのか……」（本書「あとがき」より）著者はこの問いを実に丁寧かつ楽しく捉え、身近な言葉の謎に迫っていきます。その過程はまさに探求の旅で、人間の思考とは何なのかを考える壮大なものになります。数々の激賞もむべなるかな。こういう新書は末永く読み継がれていってほしいです。

⑩『別冊本の雑誌 21　本の雑誌の目黒考二・北上次郎・藤代三郎』／本の雑誌編集部編／本の雑誌社／ 3, 300 円
北上次郎さん、大好きでした。一度だけお目にかかることができたことは一生の思い出です。北上ファンにはバイブルになるようなこのメモリアルブック、届くことのない感謝と哀悼の気持ちを込め、鬼籍に入られた年のベストブックに選びます。

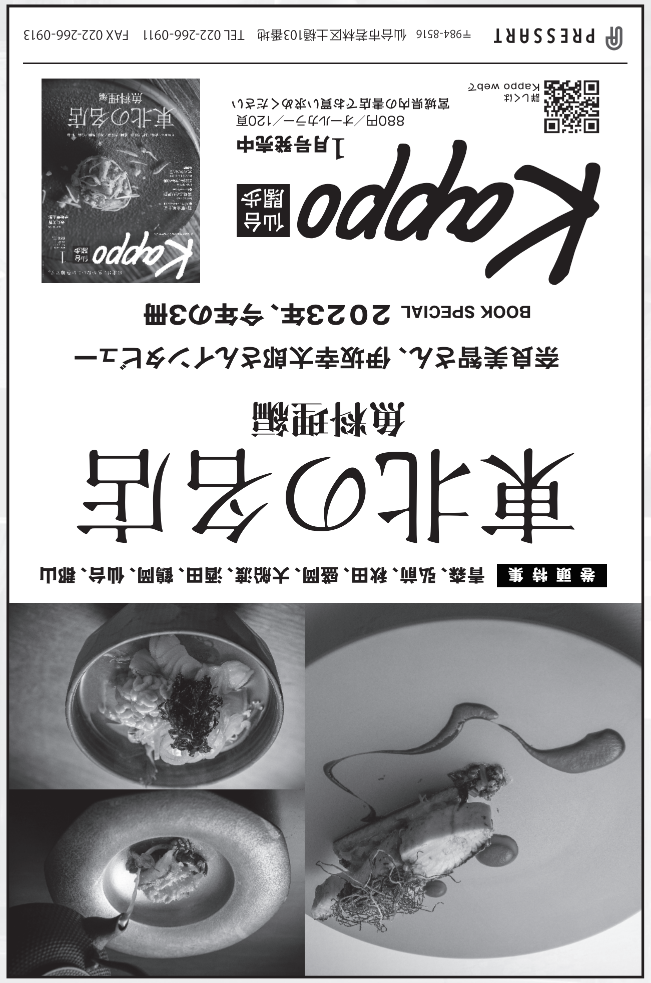
東北大学出版会

防災の国際潮流とその実務的知識体系
竹谷公男　著
A5 判／並製本／3,300 円（税込）

マックス・シェーラーの倫理思想
―〈倫理的人格の生成と存在〉の視座から ―
岩谷信　著
A5 判／並製本／6,380 円（税込）

東北大学教養教育院叢書　大学と教養第 6 巻
転換点を生きる
東北大学教養教育院　編
A5 判／並製本／2,750 円（税込）

〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1　東北大学構内
電話 022-214-2777　FAX022-214-2778
e-mail info@tups.jp　URL https://www.tups.jp



巻頭特集　青森、弘前、秋田、盛岡、大船渡、酒田、鶴岡、仙台、郡山

東北の名店
魚料理編

奈良美智さん、伊坂幸太郎さんインタビュー
BOOK SPECIAL　2023年、今年の3冊

Kappo 仙台闊歩
1月号発売中
880円／オールカラー／120頁
宮城県内の書店でお買い求めください
詳しくは Kappo webで

PRESSART　〒984-8516　仙台市若林区土樋103番地　TEL 022-266-0911　FAX 022-266-0913

荒蝦夷の本　好評発売中

震災学 vol. 17　東北学院大学発行
いとうせいこう／今村文彦／茂木謙之介／金菱清／佐藤厚志／石沢麻依／木村紅美ほか【第６回仙台短編文学賞受賞作発表】
本体2000円+税　2023年４月刊　＊バックナンバーもあります。

仙台フォーラス3階〈BOOK SPACE あらえみし〉

新刊も古書もカフェもあります！　週末のトークイベントもお楽しみに！
東京創元社フェア（開催中）、論創社ミステリフェア（開催中）、幻戯書房・新紀元社・白水社合同フェア（１月中旬～）、苦楽堂フェア（２月初旬～）。

1/2・3 初売　書籍詰め放題福袋（1000円・3000円）

10:00～20:00／年内休まず営業・2024年1月2日～2月29日営業
〒980-8546　仙台市青葉区一番町 3-11-15 TEL＆FAX 022-298-8455
X（旧twitter）@BSara_staff

仙台路地裏〈古本あらえみし〉

仙台駅にいちばん近い古本屋。東北ゆかりの作家から民俗・歴史、仙台・宮城の本、ミステリ、ＳＦ、幻想文学、児童書、写真集まで。盛林堂ミステリ文庫やヒラヤマ探偵文庫にもご注目ください。

平日・土日祝 12:00～19:00／水曜定休
〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡 4-7-12 TEL＆FAX 022-298-8455
仙台駅東口より徒歩５分、「テンザホテル・仙台ステーション」裏手。
地下鉄宮城野通駅［北２出口］が便利です。

（有）荒蝦夷　http://araemishi.la.coocan.jp/　X（旧twitter）@araemishi

川元茂（編集者／プレスアート「Kappo」ブランドマネージャー）

1967年、宮城県生まれ。プレスアート取締役。タウン情報全国ネットワーク理事。仙台短編文学賞事務局長。日本ワイン（主に東北）とレコードの深い沼にはまり、夏の暑さを言い訳にインドア活動が多かった2023年。2024年は目指せ10キロ減！

【総評】 レコードの沼にはまったせいか、今年は音楽に関する書籍を数多く読みました。曲を聴くだけでなく、ミュージシャン達の人生や言葉を音楽とともに味わいたくなったのでしょう。少年の頃、仰ぎ見たレジェンドアーティストたちの多くが鬼籍に入ったことが関係あるのかもしれません。坂本龍一さん、髙橋幸宏さん、谷村新司さん、ロビー･ロバートソンさん（ザ･バンド）、ティナ･ターナーさん、ジェフ・ベックさんなど、多くの方が亡くなりました。そして今年は漫画を読み直す機会が多くありました。塩竈のふれあいエスプにある『長井勝一漫画美術館』を観て、そういえばあまり『ガロ』に触れて来なかったと思い、昭和40年代の『ガロ』やつげ義春を読み耽けりました。自宅の段ボールにしまってあった『ブラックジャック』『マカロニほうれん荘』『AKIRA』なども読んでいました。若い頃に触れたり、通り過ぎてしまったサブカルを50代半ばになって新鮮な気持ちで楽しんでいます。

①『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』／坂本龍一／新潮社／2,090円
中学で「テクノポリス」「東風」を聞き、高校生になって「戦メリ」を観、大学の頃「ラストエンペラー」のアカデミー作曲賞受賞のニュースに歓喜し、「Energy flow」に癒される。今年亡くなった坂本さんは、世界的な音楽家でありながら、私にとっては同じ時代をともに生きた親しみのあるアーティストでした（NHKFMサウンドストリートも聴いていました）。震災後は「No Nukes,More Trees」のメッセージを掲げ、岩手・宮城・福島の子供たちとともに東北ユースオーケストラを設立するなど、被災地でも積極的に活動した坂本さん。死の直前まで指揮を執った偉大な音楽家の肉声が頁を繰るたびに聞こえてきます。

②『インドとビートルズ　シタール、ドラッグ＆メディテーション』／アジョイ・ボース（朝日順子訳）／青土社／2,860円
今年27年ぶりに新曲「Now And Then」がリリースされたビートルズですが、彼らがアイドルからアーティストに変貌する過程においてインドが重要なピースだったと本書は説きます。なぜジョージがシタールにはまったのか。なぜジョンは導師マハリシ･マヘーシュ･ヨーギーを信じ、のちに彼をこき下ろす「セクシー・セディー」を歌うに至ったのか。インド人ジャーナリストが刺激的なエピソードを積み重ね、1968年ヒマラヤ山脈の麓にあるヨガの聖地リシケシュに滞在した４人のビートルたちの日々を掘り下げます。

③『滅ぼす』（上下巻）／ミシェル・ウエルベック（野崎歓・齋藤可津子・木内尭訳）／河出書房新社／上巻2,420円、下巻2,585円
フランスを代表する作家の最新作です。2027年のフランス大統領選を舞台にしていますが、題材の選び方が抜群に上手いなと思います。夫婦の性、親の介護、兄弟との仲、仕事の来し方など、中年男性の関心事を余すところなく描きます。スキャンダラスな作品を連発してきた彼ですが、お得意の過激な性描写は影を潜めるも、圧倒的なリーダビリティは健在。作風が変わった気がするのは、年齢による達観か、仮の姿か。次回作も楽しみです。

④『トラスト　ー絆／わが人生／追憶の記／未来ー』／エルナン・ディアズ（井上里訳）／早川書房／3,960円
舞台は1920年代のニューヨークです。投資家のベンジャミン・ラスクとその妻ヘレンが主人公です。ニューヨークの金融界で大成功を収めながらも早逝した妻との夫妻愛を描いたベストセラー小説が第１部なんですが、第２部の夫の自伝用草稿、第３部のゴーストライターによる回想録を読むにつれ、徐々に人物像が揺らいできます。第４部の妻ヘレンの日記を読むと……、これ以上は言えません。本書は2023年ピュリッツァー賞受賞作です。語り手の意図や解釈によって記録は変わり、歴史も変わっていくのでしょう。

⑤『街とその不確かな壁』／村上春樹／新潮社／2,970円
これだけのベストセラーを選ぶのはなかなか勇気がいりますが、ほぼすべての村上作品を読んでいる身として、今回ベストテンに入れることにしました。理由は第一部がとても良くて、「きみ」を探し求める「僕」の切なさが響いたからです。とはいえ、第二部、第三部にいささかマンネリズムを感じ、自分の中でこの小説を封印していました。そんなとき『新潮』2023年６月号で小川哲が書いた「『集大成』なのか、『再生産』なのか」という批評を読み、得心しました。これはマンネリズムではない、『集大成』なのだと。デビュー２作目の中編を40年かけて書き直した作者の真意を味わいながら、しみじみ読みたいものです。もう新作が読める機会は少ないのですから。

⑥『存在のすべてを』／塩田武士／朝日新聞出版／2,090円
発端は前代未聞の二児同時誘拐事件です。一人はすぐに解放されますが、もう一人は３年後に突如帰宅します。３年もの間、子供は、どこで、誰と暮らしていたのか。未解決に終わったこの誘拐事件を追いかけて新聞記者はかつての刑事たちを訪ね歩きます。そこに突然現れた天才写実画家。その画家は誘拐事件で３年後に解放された子どもの30年後の姿でした。物語の設定からゾクゾクしますし、グリコ森永事件に題をとった作者の出世作『罪の声』（講談社）を思い出す人も多いでしょう。画壇の醜い内幕も興味深く読みました。読後、松本清張の小説を思い出したのは私だけでしょうか。

⑦『ポール・サイモン全詞集を読む』／栩木伸明／国書刊行会／4,950円
それにしても分厚い一冊です（全624頁）。ポール・サイモンを偏愛する著者は『ポール・サイモン全詞集1964–2016』（国書刊行会）の訳者であり、本書を通してポールが書いた（歌った）全210曲のすべてを社会的・文化的・伝記的な背景とともに考察します。ロックやポップスの歌詞を文学として読む試みは英語圏ではすでに認知されていて、その証左としてボブ・ディランのノーベル文学賞受賞があると著者は説きますが、これについては100%同意します。歌詞も文学なのです。そして３種のリズムが＜共通語＞としてポップソングを支配しているという説も興味深い指摘です。

⑧『東北史講義　【近世・近現代篇】』／東北大学日本史研究室編／ちくま新書／968円
100周年を迎える東北大学日本史研究室の創立記念事業として、若手・中堅研究者によって執筆された最新版の東北史です。現在の東北のポジションを規定したとされる奥州仕置や戊辰戦争を軸に、明治期の東北開発や東北の軍隊の派兵など、中央に対し周辺として構造化された「東北」の歴史を振り返ります。個人的に関心をもったのは満州の戦いにおいて、東北の第二師団（仙台）と第八師団（弘前）が大活躍した事実。なかでも第二師団長の多門二郎らによる凱旋パレードで仙台市は南町通を「多門通」と改称するほど熱狂したといいます。通史として読むがゆえに、東北の光と影が際立つ一冊です（主に影ですが……）。

⑨『硫黄島上陸　友軍ハ地下ニ在リ』／酒井聡平／講談社／1,650円
硫黄島で玉砕した兵士２万人超のうち、１万人の遺骨がいまなお島内に残されている――。著者は、硫黄島守備隊が死を覚悟し、最後に送った電報を父島側で受け取った祖父をもつ地方紙の新聞記者です。硫黄島の戦いの記憶が風化することに抗う記者になろうと、遺骨収集団に加わり、なぜ１万人の遺骨が戻ってこないのかを探ります。４度も硫黄島に上陸し、機密文書を調査し、たどり着いた真実とは……。太平洋戦争での海外戦没者は約240万人。これまで収容された遺骨は約127万体。まだ100万人が戻ってきていません。戦死しても必ず家族のもとに帰すと約束する米軍との違いを感じてしまいます。

⑩『土門拳の東寺』／土門拳／クレヴィス／2,970円
京都の東寺とは10年来のお付き合いがあります。Kappoの「神様さんぽ」で東寺の仏画家を取材したことをきっかけに、2013年に東寺お砂踏みを藤崎百貨店で開催し、2019年には国立博物館の国宝東寺特別展でグッズを販売させてもらい、いまも付き合いが続きます。今年は真言宗立教開宗1200年という記念すべき年（空海が嵯峨天皇から東寺を託されてなんと1200年！）です。東寺の見慣れた境内や仏像を土門はどう表現したのか、改めて知りたくて本書を手にしました。1964年当時の静謐な境内、帝釈天や兜跋毘沙門天の得も言われぬ表情、土門が個人的に好きだと言う観智院の鉄釘など、偉大な写真家の眼が切りとった東寺の姿がここにあります。

土方正志（編集者・作家・エッセイスト／荒蝦夷）

出版社〈荒蝦夷〉代表取締役。編集者・作家・エッセイスト。1962年、北海道生まれ。仙台短編文学賞実行委員会代表。宮城県古書籍商組合理事。東北工業大学非常勤講師。『ユージン・スミス　楽園へのあゆみ』（偕成社）や『瓦礫から本を生む』（河出文庫）など著書多数。最新刊は『仙台あらえみし日和』（プレスアート）。仙台駅東口で〈古本あらえみし〉が、仙台フォーラスで〈ブックスペースあらえみし〉が営業中です。

【総評】 どうやら今年の私の読書は、エッセーや紀行文学に傾いていたようです。

①『パピルスのなかの永遠　書物の歴史の物語』／イレネ・バジェホ（見田悠子訳）／作品社／5,280円
本に関する本、それもブツとしての本の来歴を語る本が好きです。その今年の大収穫です。スペインの作家が人類にとっての本の歴史をたどります。それも活版印刷誕生以前、メソポタミアの粘土板からギリシア・ローマのパピルスに羊皮紙まで、私たちがいま手にしている本、それ以前の本ならざる本の悠久を語った大長編エッセーです。いにしえの本を語りながらそれと決して無縁ではない私たちの本とその文化へと話題は広がります。愉しくもあり、どこか夢幻的でもあり、一読、いまここに本があってよかったとみなさんも思うはずです。

②『長い物語のためのいくつかの短いお話』／ロジェ･グルニエ（宮下志朗訳）／白水社／2,860円
2017年に98歳で没した仏文壇のレジェンド、生前さいごの短編集です。新聞記者として編集者として、そして短編小説とエッセーの名手として生きた著者が、人生の終末を意識しながら、記憶の断片をユーモラスにノスタルジックに、そして温かく鋭敏に綴って、これまた自叙伝なのか文学作品なのか、はたまたエッセーなのか、いずれにしてもふわりと読者を酔わせてくれる傑作揃いです。

③『珈琲と煙草』／フェルディナント･フォン･シーラッハ（酒寄進一訳）／東京創元社／1,760円
独特の世界観で日本でも人気の独作家の、これまた独白的なエッセーなのか、小説なのか、ナチスの大物だった祖父の影や自らの若き日の思い出、作家として弁護士としての日常で出会ったさまざまな人生の断片が、あざやかに、けれども静かに並びます。そこからなにを受け取るかは読者にゆだねられています。

④『無限角形　1001の砂漠の断章』／コラム・マッキャン（栩木玲子訳）／早川書房／4,620円
パレスチナのテロリストの自爆テロに娘を殺されたイスラエルのユダヤ人。イスラエル軍に娘を殺害されたヨルダン川西岸のパレスチナ人。そんなふたりの男の物語です。立場を異にしながら、娘を亡くした哀しみと怒りを絆にふたりは仲間たちと連帯します。「話しあわなければ、終わらない」をスローガンにさまざまな障壁を乗り超えて、それぞれの同胞に、世界に訴えます。静かでありながら頑強な行動力がすごいです。本書はアイルランド人作家によるノンフィクション・ノベル、実話です。ふたりの軌跡と彼の地の過去と現在を1001の短い断章で綴ります。とはいえ、いわばいうところの「感動の実話」に終わらないのは、報道などでご存じの通りです。原著は2020年。本書に描かれた人たちは、いまなにを思うか。無事でいるのか。気になります。

⑤『アントンが飛ばした鳩　ホロコーストをめぐる30の物語』／バーナード・ゴットフリード（柴田元幸・広岡杏子訳）／白水社／3,850円
ナチス・ドイツのホロコーストを生き延びたユダヤ人少年が、第２次世界大戦後、アメリカに渡り、写真家となります。けれども自らの体験を語ることはありませんでした。記憶を記録に残しはじめたのは還暦をすぎてから。人生に漂白された怨讐や愛憎や悲劇を、生と死や失われた時を、淡々と、けれども底なしに哀しく美しく、そしてやさしく綴って読者を静かに圧倒します。帯文に「ホロコーストはユダヤ人のものだけではない」とあります。本書を読まれたらユダヤ人に故郷を追われたパレスチナ人の物語、ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って／太陽の男たち』（河出文庫）もぜひ。こちらについては『文庫で読む100年の文学』（中公文庫）に書かせていただきました。

⑥『「すべての野蛮人を根絶やしにせよ」『闇の奥』とヨーロッパの大量虐殺』／スヴェン･リンドクヴィスト（ヘレンハルメ美穂訳）／青土社／2,860円
なんとも刺激的なタイトルはジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』の一節です。『闇の奥』はフランシス・フォード・コッポラ監督の映画『地獄の黙示録』の原作として知られます。狂えるクルツ大佐が未開の地に自らの王国を築きます。スウェーデンの作家がその『闇の奥』の背景となったヨーロッパ帝国主義国家による19世紀アフリカ植民地現地人虐殺事件の現場をたずね、さまざまに思索を凝らした紀行文学です。人種差別、優生思想、帝国主義、ナチス・ドイツを経ていまも私たちを束縛するさまざまな「思想」の淵源に迫ります。とてつもなく重たいテーマですが、旅する作家の厳しくありながらもやわらかな視線にすくわれます。

⑦『帝国の追放者たち　三つの流刑地をゆく』／ウィリアム・アトキンズ（山田文訳）／柏書房／2,970円
こちらも紀行文学です。米作家が向かったのはニューカレドニア、セントヘレナ、サハリン。欧米帝国主義国家が、反政府主義者や犯罪者の流刑の地とした海のかなた、地の果ての島々です。そして追うのは、政府に叛旗を翻したフランスの女性アナキスト、植民地戦争で敗者となったアフリカの若き王、帝政ロシアに抵抗したユダヤ人青年の足跡です。故郷から追放されて流浪する彼ら彼女たちはどのような人生を送り、流刑の地でなにを思ったのか。帝国中枢とはるか離島の地理的な意味、国家と個人の衝突、そこから見えてくる歴史をたどる思索の旅の記録です。

⑧『文明交錯』／ローラン･ビネ（橘明美訳）／東京創元社／3,300円
帯文にいわく「スペインがインカ帝国を、ではなくインカ帝国がスペインを征服！」とあります。もちろん前段が歴史的事実、後段こそが本書の世界です。ヨーロッパ人の侵略によって植民地化されたアメリカ大陸ですが、本書ではそのヨーロッパ人を迎え撃ったインカ帝国が勝利を収め、逆に大西洋を渡ってスペインを征服、やがてヨーロッパ全域を支配下に。ちょっとＳＦチックな設定で文明の衝突と交錯を描き切った壮大な歴史改変小説にして思考実験小説です。歴史を反転することによって、逆にその実像がくっきりと見えてきます。なにせ『ＨＨｈＨ　プラハ、1942年』と『言語の七番目の機能』（共に東京創元社）のビネです。歴史的事実をとてつもない奇想でねじふせて傑作をモノする、まるでフランスの山田風太郎みたいな作家、私のごひいきです。

⑨『未知なる地球　無知の歴史18-19世紀』／アラン･コルバン（築山和也訳）／藤原書店／2,970円
時代小説や歴史小説を読んでいて、たとえば「みんなで雨乞いしてるけど、この人たち、どうして雨が降るのか知らなかったんだもんなあ」なんて、私たちがいま常識としていることが昔の人たちにはそうではなかったと、ふと不思議な気持ちになったりします。とすると、そもそもが昔の人たちと私たちの世界観、根本からかなり違ったのでは。これ、どこかで意識していないと、古典など読み間違ってしまうこともありそうです。本書はそんな疑問を追求します。北極って、南極って、海の底ってどうなっているのか、まずはみんながとんでもない想像をします。やがて探検の世紀がはじまって、科学が発達して、その結果が今度は文学や芸術に影響を与えます。そんな道筋を仏歴史家が解き明かします。おもしろくて、ちょっと目ウロコだったりもします。

⑩『アルベール・ロンドル　闘うリポーターの肖像』／真野倫平／水声社／4,400円
ルポライターの「ルポ」は、フランス語「ルポルタージュ」の日本語略称です。ルポライターの呼称もここから生まれました。フランス語がルーツだとは知っていました（竹中労さんか鎌田慧さんの本で読んだような）が、そのルポライター第１号、20世紀初頭の仏人ジャーナリストの評伝です。第１次世界大戦の戦場から植民地アフリカへ。日本を含めたアジアから南米大陸へ、イスラム世界へ。まだまだ気軽に旅などできなかった世界の裏側を精力的に取材、ヨーロッパのメディアを湧かせます。本書には彼の記事の翻訳も収録されているのですが、これぞルポルタージュ！　ロンドルのルポ、もっと読みたくなりました。